

## 山内謙吾資料（関西大学総合図書館所蔵）について

―黒島伝治未発表はがき二通の紹介―

浦西和彦

蔵原惟人は、「最近のプロレタリア文学と新作家」（『改造』昭和四年一月号）で、昭和三年における日本文壇の状況を、次のように概括した。

一九二八年の日本文壇はプロレタリア文学によってリードされていたかのごとき観を呈したのである。以前から名の知られていた作家の中では特に、藤森成吉、前田河広一郎、林房雄、黒島伝治等が活動した。しかし、この年の最も著しい現象は、この年に幾多の優れた新作家が現われてきたことである。それらは――『文芸戦線』の平林たい子、山本勝治、山内謙吾、「戦旗」の立野信之、橋本英吉、小林多喜二等である。

昭和三年三月十五日の全国的な大弾圧、いわゆる「三・一五」事件を契機として、蔵原惟人、藤森成吉、山田清三郎、村山知

義らの前衛芸術家同盟と、中野重治、鹿地亘、谷一、森山啓らの日本プロレタリア芸術連盟との合同が急速に具体化した。三月二十五日には合同声明が出され、四月二十八日に創立大会を開催して、全日本無産者芸術連盟（ナップ）が成立したのである。この全日本無産者芸術連盟は、地下の日本共産党を支持する。一方、青野季吉らの労農芸術家連盟は、政治的立場を社会民主主義においた。この二つの組織が拮抗しながら、プロレタリア芸術運動は展開されていく。それぞれの組織から有力な新人作家が出現したことによって、「一九二八年の日本文壇はプロレタリア文学によってリードされていたかのごとき観を呈した」のであり、プロレタリア芸術運動の高揚した時代を迎えるのである。

戦後になって、蔵原惟人が『文芸戦線』の作家たち――『プロ

レタリア文学発展史講座より』——(「多喜二と百合子」昭和三十年二月一日発行、第八号)で、『文芸戦線』にこの時期になつてから、新しい二人の作家が現われてきた。この二人の作家は今ではほとんど忘れられてしまつておりますけれども、優れた短編を『文芸戦線』に載せ始めた。その一人が山内謙吾、もう一人が山本勝治です」と、山内謙吾の「線路工夫」と山本勝治の「十姉妹」を「非常に優れたもの」として論じたことがあつた。また、山本勝治の「十姉妹」と「員章を打つ」の二編は『日本プロレタリア文学集・11(「文芸戦線」作家集2)』(昭和六十年十二月二十五日発行、新日本出版社)に、山内謙吾の「線路工夫」「三つの棺」「掃除夫」「異徒」の四編が『日本プロレタリア文学集・12(「文芸戦線」作家集3)』(昭和六十一年一月二十五日発行、新日本出版社)に収録されているが、しかし、今日、

平林たい子や小林多喜二らと同時期に文壇に登場した「文芸戦線」の有力な新人作家であつた山内謙吾や山本勝治については、その名前さえも忘れられた存在となつている。だが、例えば、山本勝治の「十姉妹」は、久保田正文が「人物の形象的とらえかたのたしかさ、構成のダイナミズムにおいて、うたがいもなく秀作である」(『日本現代文学全集69(プロレタリア文学集)』(昭和四十四年一月十九日発行、講談社)と評したように、

今日読んでも優れた農民小説の一つである。私は、かつてこの山本勝治について、関西大学「国文学」昭和五十二年九月二十五日発行、第五十四号)に、「山本勝治と『十姉妹』」を書いたことがある。その時、山本勝治も山内謙吾も「経歴さだかならず」となつていた。いつどこで何年に生まれたのか一切未詳のままになつていたのである。山内謙吾については、前出『日本現代文学全集69(プロレタリア文学集)』巻末の「山内謙吾年譜」には、次のように記されていた。

経歴さだかならず。葉山嘉樹のすすめで「労芸」に参加。昭和三年、四月、小説「線路工夫」を「文芸戦線」に発表。六月、「三つの棺」、十月、「毛皮の女」を「文芸戦線」に発表。昭和四年、一月、「掃除夫」、八月、「暴徒」をいづれも「文芸戦線」に発表。山本勝治とともに、「文戦派」の新人として活躍した。昭和七年、検束、その後文学を離れた。

山本勝治のことを調べた時、山本勝治と同じく「経歴さだかならず」のままになつている山内謙吾のことを明らかにしたいと思つた。そこで「山本勝治と『十姉妹』」において、その時に知りえた山内謙吾の情報として、「創作月刊」(昭和四年一月一日発行、第二巻一号)の「昭和四年度文士録」に寄せた山内謙吾の回答を紹介しておいた。いまもう一度それを引用してお

く。一、略歴。二、好きな自作。三、面会日。四、現住所の四項目について、山内謙吾は、次のように述べている。

一、十六歳の春、駅夫を振り出しに警視庁給仕、印刷局職工、郵便配達、雑誌記者、校正係、鉄筋工、機関庫掃除夫等を  
経て今日に至る。

二、「線路工夫」

三、毎日いつでも。

四、東京市外杉並町高円寺六一一

山内謙吾は、その作品からも推測できるように、大学を卒業したインテリ作家ではなかった。駅夫を振り出しに、警視庁給仕、印刷局職工、郵便配達、雑誌記者、校正係、鉄筋工、機関庫掃除夫等の労働体験を得て、労農芸術家連盟に加わったのである。その後、『壺井繁治全集第五卷』（昭和六十四年三月一日発行、青磁社）に収録されている壺井繁治の「年譜」の「大正七年」の項に、「十一月、東京中央郵便局書留課に臨時通信事務員として勤務。日給五十銭、特別手当五十銭。職場で後の作家山内謙吾を知る」とあるのを知って、山内謙吾が「郵便配達」をしていたのは、東京中央郵便局であることが判明した。また『壺井繁治全集別巻』（昭和六十四年八月一日発行、青磁社）の、口絵に「1919年 左・郵便局時代の友人山内謙吾彼は

『線路工夫』を書いた」と説明された、東京中央郵便局に勤務していた壺井繁治と山内謙吾との二人が一緒に撮った写真一葉が掲載されている。これによって山内謙吾が東京中央郵便局で配達をやっていたのは大正七、八年であったことが明らかにになった。山内謙吾が作家になる前から、壺井繁治とは友人関係にあった。山内謙吾は壺井繁治との交流を通して、黒島伝治を知ったのではないかと思われる。黒島伝治は壺井繁治のすすめで川合仁を中心として出された同人雑誌「潮流」に「電報」を大正十四年七月号に発表した。山内謙吾も壺井繁治の紹介で「放浪断片」を「潮流」大正十五年二月号に載せている。

山内謙吾は黒島伝治と行動を共にし、昭和五年十一月に労農芸術家連盟を脱退した。そして文戦打倒同盟を結成し、十二月に機関誌「プロレタリア」を刊行した後、ナルプに参加した。山内謙吾は、昭和六年二月十日に創刊された「大衆の友」の「編輯兼印刷発行人」となったり、プロレタリア文化連盟（コップ）時代には、コップの機関誌「プロレタリア文化」第二巻一号（昭和七年一月一日発行）から第三巻九号（昭和九年一月八日発行）まで「発行編輯兼印刷人」となるのは、壺井繁治との古くからの友人関係であったことと結びついていたのであろうか。どちらにしても、山内謙吾と壺井繁治との関係を昭和五十年代に

知っておれば、生前の壺井繁治に聞くことができたのにと悔やまれるのである。「経歴さだかならず」であつた山内謙吾の調整はここで行き詰るのである。

しかし、資料というものは何が散逸しないで残っているか、不思議なものである。全く予期もしないところから突如として資料が出てくるといふことがある。黒島伝治の著書を関西大学総合図書館で所蔵詮索していると「山内謙吾資料」／「山内謙吾」著：〔15〕・1〔自筆〕・1936〔15〕総合文庫特別LO2\*Y\*80\*14 205952372」というのが目に飛び込んで来たのである。閲覧してみると、黒島伝治宛はがきの山内謙吾の下書き原稿であつた。関西大学総合図書館に山内謙吾の自筆原稿などが所蔵されていたのである。これには驚いた。関西大学総合図書館が「山内謙吾資料」をいづつどういふいきさつで所蔵することになったのか。知らないが、多分浪速書林あたりから大阪文学関係の資料として購入したのであろうか。関西大学総合図書館が所蔵する「山内謙吾資料」は全部で三十四点である。その多くは小説などの山内謙吾の自筆草稿原稿である。貴重書扱いとなつている為、借り出すことが出来ないの、くわしく検討したわけではないが、その概要をここに簡単に紹介しておきたい。

1 「山内謙吾資料」／「山内謙吾」著 LO2\*Y\*80\*31  
「不幸なる幸福」と題した「ラジオ脚本」原稿。署名は阿蘇次郎。四百字詰原稿用紙十八枚。作品の末尾に「一一九二五・六・一五」とある。若き男爵山名宗貞と歌劇女優愛子と許嫁奈美子との三人の関係を描く。

2 「山内謙吾資料」／「山内謙吾」著 LO2\*Y\*80\*30  
「夢日記 一九二七年自一月至六月」と題する草稿、四百字詰原稿用紙百三十枚。

「夢日記 一九二七年自一月至十二月」と題する草稿、四百字詰原稿用紙二十四枚。

日記とあるが私小説風の創作である。署名は山内謙吾。

3 「山内謙吾資料」／「山内謙吾」著 LO2\*Y\*80\*29  
「夢」と題した小品。四百字詰原稿用紙四枚。無署名。昭和初年頃の執筆か。

4 「山内謙吾資料」／「山内謙吾」著 LO2\*Y\*80\*28  
「反動『文戦』の檄に酬ひる」と題する評論。四百字詰原稿用紙十七枚。署名は山内謙吾。原稿用紙の右欄外に「お返しするのが大変遅くなつてすみません。これは当時掲載に不適當と思はれたので止めましたが、御諒知くださいますやう。

（編輯局）」の書き込みがある。昭和五年末か昭和六年の執

筆。

5〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 27  
「文学大衆化の実践について」と題した評論の草稿。用紙十枚。

6〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 26  
「光なき村」と題した小説草稿。四百字詰原稿用紙四十七枚。署名は山内謙吾。末尾に「(つづく)」とある。

7〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 25  
「故郷」と題した小説草稿。四百字詰原稿用紙三十八枚。署名は山内謙吾。昭和初期頃の執筆か。

8〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 24  
「春はカムチャツカにも」と題した小説草稿。四百字詰原稿用紙二十九枚。署名は川口虎雄。原稿用紙の右欄外に「事実小説応募原稿」という書き込みがある。

9〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 23  
題名が記されていない小説草稿。用紙九枚。無署名。昭和初年頃の執筆か。

10〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 22  
題名が記されていない小説草稿。四百字詰原稿用紙五枚。無署名。昭和初年頃の執筆か。

11〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 21  
題名が記されていない小説草稿。用紙三十枚。無署名。「大東亜戦争第三年目の三月で、戦争はいよいよ決戦段階に入り、兵器の製造に直接のつながりをもつこの工場生産は」という書き出しではじまり、昭和十九年の執筆か。

12〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 20  
題名が記されていない小説の草稿。四百字詰原稿用紙二十八枚。無署名。「一、悲しき発端」「二、愛に飢えたる女達」の章で構成されている。原稿末尾に「未完」とある。昭和初年頃の執筆か。

13〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 17  
「原稿控簿」と表紙にペン書きされた大学ノート一冊。「昭和四年頃(昭和八年頃筆記)」とある。創作予定の材料かと思われるものと、「鉄骨」など建築関係の仕事の記述がある。

14〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 15  
黒島伝治宛はがきの下書き。「通勤証明書」(尼崎浜字海地十七の三番地日本研磨機工作所)の裏面に書かれている。山内謙吾は昭和十年代に尼崎市の日本研磨機工作所勤務していたのであろうか。

15〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 14

「呪はれた血」と題する小説の草稿。用紙十枚。無署名。「私の郷里九州のK市にお絹という十七になる娘がゐた」という書き出しではじまる。末尾に「一九三六・八・二七」とある。

16〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 LO2\*Y\*80\*13  
「憎悪」と題された小説の草稿。用紙十四枚。署名は山内謙吾。「昭和十六年六月五日作」とある。

17〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 LO2\*Y\*80\*12  
「海浜の女達」と題された小説の草稿。用紙八枚。無署名。  
「昭和十六年五月二十二日作」とある。欄外に「モダン日本五月二十四日投 筆名堀英之助／原稿末尾、江成四一八〇本名で署名ス」という書き込みがある。

18〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 LO2\*Y\*80\*11  
「従妹」と題する小説の草稿。用紙十四枚。署名は山内謙吾。「一九四一・五・一〇」と末尾にある。欄外に「昭和十六年五月十二日『文庫』投稿／原稿末尾ニハ江成町山内建築事務所内山内謙吾、筆名堀英之助を用ふ」という書き込みがある。

19〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 LO2\*Y\*80\*10  
題名が記されていない小説の草稿。四百字詰原稿用紙三十枚。署名は山内謙吾。昭和初年頃の執筆か。建築現場が舞台

となつてゐる。

20〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 LO2\*Y\*80\*9  
「函面受渡帖No.1／工程課 17年5月30日」、「日記と詩（昭和19年）」と表紙に書かれた大学ノート一冊。住宅の見取図等がペンや鉛筆書きされた後、詩や短歌が書かれている。

21〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 LO2\*Y\*80\*8  
詩「反撥する意志」（昭和十九年一月二十四日）、「元旦」（昭和十九年一月二日作）、「霧の中の幻想」（昭和十九年一月二十四日）、「大望」（昭和十九年二月十六日）の四編が用紙四枚に記されている。このうち「元旦」と「反撥する意志」を、次にあげておく。

元 旦

ほの暗き御社の

奥のともし灯を見つめて

私はじつと頭を垂れる

一瞬、氷の刃が

通り間のやうに背筋を走つた

いまこそ私は全裸となり

一切の私も去り

呼吸の根をとめて

わが無力と慥情に自責し慟哭する

遠つ大祖神は

わが数々の罪科を責めも得ませず

慈愛の手もて胸深く抱きよせ給ふ

私はしばしみこころのままに

御尊き御ふところの鼓動をわが鼓動に感じ

燦燦たる春光に身を洗ひ

邪念の涙をほふり落として

尊き御方の御子たることを誓ふ

御手洗の水の如き清冽さをもて……

昭和十九年一月二日作

反撥する意志

雲は裂け

一陣の風おこりて

霹天の一角より

老いたるしわぶきの声聞ゆ

そは 深々と

遠く千里の彼方よりきたりて

わが鼓膜をかきならす

いとけなき笛の音にも似たるかな

かかるとき

ひとむらの電

萬雷のごと襲ひきたりて

地殻をくろがねと化せしめたり

ものみなはてたる荒野に

反撥する巨木の息吹き

つぶらなる霜とかがやきて

つぶらなる霜とかがやきて

ぬばたまのごと散りてむなし

(昭和十九年一月二十四日)

22〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 5  
「一流綜合雑誌の整理統合」と題した草稿。用紙四枚。無署名。末尾に「(昭和十九年一月二十一日)」とある。

昨夜九時のラジオ報道で、印刷用紙の節約という時局の要請にこたえて六大綜合雑誌が統合整備することが決定したというのを聞いて、「ちよつと身を突かれた思ひがした」という。「支那事變の進展はわが国の言論統一にも大きな圧力が外部から加はり、次第にそれは強化されて言論の自由といふことは有名無実と化してしまった」といい、発表機関の整理縮小は文学作品の需要の減退となって現われるとすれば、誰も安心して文学することに没頭してはられないと述べる。

23〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 3  
青野季吉の「散文精神の問題」からの抜き書き。用紙五枚。無署名。

24〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著 L O 2 \* Y \* 80 \* 1  
題名が記されていない小説の草稿。四百字詰原稿用紙三十六枚。無署名。昭和二十五年頃の執筆。

25〔山内謙吾資料〕／壺井繁治著 L O 2 \* Y \* 80 \* 34  
「時機を逸す」と題した草稿。用紙三枚。無署名。末尾に「一九五三・六・六」とある。「壺井繁治著」とあるのは誤り。

26〔山内謙吾資料〕／堅山南風著 L O 2 \* Y \* 80 \* 33  
題名が記されていない草稿。用紙二十枚。「二月十日起／一月十五日休止」とある。昭和二十八年の執筆か。「堅山南風著」とあるのは誤り。

27〔山内謙吾資料〕／黒島專治著 L O 2 \* Y \* 80 \* 32  
詩「ソロバン」(昭和二十九年六月十四日)、「顔」「鏡」(昭和二十九年六月十四日)、「慟哭」(昭和二十九年六月二十日)、「眞実を愛する心」(昭和二十九年六月二十日)、「森」「神」(昭和二十九年六月二十三日)、「競輪」(昭和二十九年六月二十二日)、「後悔」(昭和二十九年六月二十六日)、「盛夏」(昭和二十九年八月十八日)、「思い出」(昭和二十九年九月四日)十一編の草稿。用紙九枚。「黒島專治著」とあるは誤り。

28〔山内謙吾資料〕／山内謙吾著 L O 2 \* Y \* 80 \* 19  
題名が記されていない戯曲の草稿。四百字詰原稿用紙三十三枚。末尾に「昭和三十一年八月作」とある。

29〔山内謙吾資料〕／山内謙吾著 L O 2 \* Y \* 80 \* 18  
詩「夜店」(一月十六日)、「発見」(一月十六日)、「足」(一月二十一日)、「石ころ」(一月二十一日)、「沈黙」(二月八日)、「眞実」(二月八日)、「追究する意志」(二月八日)、「お母さん」(二月二十七日)、「無題」(二月二十九日)、「行動」(五月



十二日)、「五月」(五月十二日)、「人みしりせず」(五月十二日)の草稿。用紙五枚。昭和三十一年の執筆。

30〔山内謙吾資料〕／山内謙吾著 L O 2 \* Y \* 80 \* 16

「思い出すまゝ」と表紙に記された大学ノート一冊。ノートに記されているのは全部で十六頁分である。「昭和39年9月24日(昭和44年9月24日筆記)」とある。この「思い出すまゝ」は、山内謙吾の幼少時代を知ることの出来る資料である。「思い出すまゝ」の最初の部分を次ぎに引用しておく。

私の幼少念時代は貧乏の中に過ごした一時期であったが、私自身は、それを別に貧乏と意識せず、大体、小学校の四年生ごろまでは平坦なカーブを描いたよき時代であったと思っっている。私が貧乏に反撥し、親に反抗するようになったのは、小学校五年生以後である。自分の家が貧乏であり、そのため、親の片腕となって働かねばならぬ位置にたたされたとき、私はそれが親孝行の道とはさとりながら、自分の将来の進路についていろいろ悩んだものである。殊に小学六年生の六月で小学校をやめ、家の手伝いに専念しなければならぬという羽目に追込まれるに至って、私の前途はまっくらになってしまった。当時父は42才、私は12才であった。ローソク製造業という仕事の性質上、そ

の頃としては年をとりすぎている父には、私という相方が入用だし、商売上いろいろなこと、自分のアゴ一つで働く若い労働力が必要だったのであらう。

その間のつらい経験も、今となってはなつかしい思い出となったが、数多い中から、これだけは書きとめておきたいと思うことどもを綴ることにした。どれもこれも、私だけがあの世へ持つていくには惜しい思い出のみである。

昭和39年9月24日

徳永直と同じような境遇で小学校の教育も満足に受けることが出来なかったようだ。山内謙吾は、小学六年生の時から、学校をやめて、「家の手伝いに専念しなければ」ならなかったのである。この「思い出すまゝ」には、母のねんこにくるまって、質屋の「格子造りの間口の広い戸をくぐった」ときの広町(南新坪井町)の夜景が「最初の記憶」であり、ロシア人の捕虜たちの思い出など断片的に綴られている。西南戦争で山内家が戦災にあつて没落していくことなどが、次のように記されている。

ここで私が成長した六間町のことについて、ちょっとふれておきたいと思う。私の生まれは明治32年6月15日、明円寺町の借家で生れ、二つのときにこの六間町に移転

し、私の上には12才の長兄茂を筆頭に、長女ももえ、二男清の三人の兄弟があった。父はろうそくの製造販売を業とし、業界では日本蠟燭づくりの名人といはれ尊敬されていたらしい。蠟燭の製造では茶屋の屋号で約50年ほどつづいた三代目の時、明治10年の西南戦争で戦災にあい、三つの倉につめこまれていた780俵（1俵は60kg）の木蠟やはぜの実が、家屋敷もろとも二日二晩もえつづいて空をこがしたという。三代目の祖父善三郎は家運の復興も意のごとくならず、明治19年1月1日53才で没した。

「熊本中が火の海で、夜も山の中まで昼のように明るくて、時々ヒュン、ヒュンとんでくる鉄砲のたまが竹やぶの竹にバリッ、ポンと音たてて恐ろしかった。ふとんにくるまっで一晩中ふるえておったがな」と当時14才だった父は戦火をのがれて一家中で立田山に避難したときのこわかった時を思いだして話してくれたことがある。父の上の善寿16才を頭に、乳呑み児まで六人も子供があったというから、生来病弱で、先代のおかげでどうやら持ちこたえてきた老舗も、再起できなかつたのだらうと思う。祖父の死までの9年間に、成長した子が上から順々に家をきらつてとび出し、復興などは思ひもよらず、一家離散の運命におち

いったのである。長男の善寿はそれでも父善三郎の死後、家督相続人たる責任と自覚をもって一家を養っていかねばならぬ立場にたたされ、その当座は、世間の同情と周囲の親類縁者の援助もあつて、何とかその日の暮らしもたつていったが、米相場に手を出したのがはじまりで、店の売上金もそのままその穴埋めに持つていかれることが多くなり、目ぼしい家財や道具類まで売りとばすようなことになってゆく。それが弟たちには面白くないので、まづ上から順に私の父の嘉太郎が見きりをつけて東京へとびだしていった。次の善五郎も出てしまう。残ったものは子供ばかりだが、これも14才位になると、勝手に家出してしまうという始末で、善寿は最後にのこった母親のサクさへも養うことができぬようになり、大阪へとびだしていく。変転の末石版印刷屋として成功した四男の嘉次郎の呼びよせて、どうやら食うことだけは出来るようになったといつて、引取られていくという始末、それが私の二才のときである。

43年8月10日

この記述によって、はじめて山内謙吾の生年月日がわかつたのである。山内謙吾は、明治三十二年六月十五日、熊本市

明円寺町で生れたのである。徳永直は明治三十二年一月二十日に熊本県飽託郡花園村で生れた。山内謙吾と徳永直は同年代の生まれであったのである。

31〔山内謙吾資料〕／山内謙吾著 LO2\*Y\*80\*7

「執筆計画」と表紙に記された大学ノート一冊。昭和四十四年三月九日から昭和四十五年一月十二日までの執筆である。

山内謙吾は戦後になってからも小説家として再起したいという意欲を持っていたのであろう。「執筆計画」の最初の部分を次にあげておく。

1、わが阿呆の一生

イ、物どころについてより、東京出ばんまで 1冊

ロ、青春、恋愛、貧乏、結婚（われら夫婦の記録） 1冊

ハ、四人の子の記録、昭和10年より20年終戦まで 1冊

ニ、同上 昭和40年までの記録 1冊

昭和40年3月9日

2、茶屋三代記

茶屋の勃興より、三代に亘る伝記

熊本、東京、細川家の各種関係記録、資料調査収集、早

い時期に以上実行、大筋をまとめること。

柳川の立花家にも注目すること。

3、春はカムチャッカにも

大正14年頃の一漁業労働者が、カムチャッカ奥地に於ける数奇な生活を描くもので、これはすでに、昭和4年頃より想を練り、最初の48枚をかいたが、そのままとなっている。600枚位にまとめること。

32〔山内謙吾資料〕／山内謙吾著 LO2\*Y\*80\*6

黒島伝治の自筆はがき二通である。「山内謙吾著」とあるのは誤り。この山内謙吾宛の黒島伝治はがきは『定本黒島伝治全集第五卷（メモ・書簡・日記他）』（平成十三年七月二十五日発行、勉誠出版）に未収録であるので、次にその二通の全文を紹介しておく。

消印 香川・安田／14・1・11／后4ー8 はがき

香川県小豆郡苗羽村 黒島伝治より

大阪市此花区江成町八〇 山内謙吾宛

新年のおはがきありがたう。

お変わりなく勤めてゐる御様子、結構です。

僕は、だいぶからだがよくなって、これから書こうと

昭和40年3月9日

思つてゐるところです。長らく書かないし、時勢も変わつてしまつて、改めて、始めからやり直して、行かなければならないので、十二三年前はじめて文壇に出たとき以上の不安と緊張と、やらうとする力を体内に感じてゐるところです。

今年、一年は、なほ、当地にとどまつて、十分仕事をしためておいて、来春になつたら出て行くつもりです。この二日に金刀比羅宮に参つて、船で鉄工所あたりへつとめてゐる人の話をきくと、月百五十円くらゐとつてゐる者はざらにあり、千五百円もとつてゐる者もあるときいたがさうですか。

消印 香川・安田／14・3・2／后418 はがき

香川県小豆郡苗羽村 黒島伝治より

大阪市此花区江成町八〇 山内謙吾宛

おはがき拝見しました。壺井夫人は、昨年九月号の「芸」に「大根の葉」といふ小説をかいいて、好評を博し、それで、この三月号に又かいたさうだ。「大根の葉」といふのはよんだが、今度のは僕はまだ見てゐない。いつも古雑誌

を見てゐるので、よむのは、三四ヶ月の後になるわけだ。

坪田、伊藤（永）両君が新潮社賞を受けたのは知つてゐるか。伊藤永之介君は、なか／＼小説がよくなつてゐるよ。深味ができ、且つ肉がついてきた。

「大地」も「母」も、僕はよんでゐない。持つてゐるなからかしてくれないか。なにしろ田舎にゐて不便だし、金はないし、ほしい本が手に入らないのが一番よはる。

僕は、久しぶりで小説をかいいてゐる。小説をかき得るうれしきは、長くかゝなかつた後では特別だな。そしてやつぱり小説をかくことによつて生きがひを感じ得る。

ここで先の「14〔山内謙吾資料〕／〔山内謙吾〕著」の黒島伝治宛書簡の下書きを紹介しておく。昭和十三年か十四年に書かれたものか。

三月二十三日 黒島伝治宛 はがき

おはがきありがたう。毎日の忙しい仕事の中にも、夜だけは自分のからだになりきつて、この頃またぼつぼつ本を読んでゐます。暫らく読書に没入することの生活から遠ざかつてゐた自分が悔ひられてならぬほど、この読書は僕を

いま非常に元気づけ鞭打つてくれる。この年になって、何もかもやり直しのつもりで、文学のイロハからまた勉強してゐるが、それが奇態に妙な魅力となって僕のしぼんだ情熱をかきたて、くれるやうだ。負けおしみではない。年はとつたが今からでも決しておそくはない。僕の今の職業上の位置や環境が、自分に文学を捨てさせるどころか、逆に

一層これへの接近と包含を促す。近い内に、勤労者としての自分への考へをまとめて一つ宛読物にかきあげて行きたいと思つてゐる。今日の時局下国民の勤労に対する関心やその緊迫が戦争遂行に関連してあらゆる角度から検討され、問題とされてゐながら、単なる職場からのレポルタージユ以外に見るべき作品がかゝれてゐないといふことは一体どうした訳だろう。農村の現実面を活写した小説戯曲は最近非常な数に上つてゐる。そして一つ一つそれらは新しい視点に立つてその作品を意義づけてゐる。しかし戦争行動の最尖端に立つて全面的に厳しい歴史的役割を果たしつつ、ある今日の日本の重工業の生産面を描いたものが一つも見当らぬといふことは非常に淋しい気がする。島木健作の「生活の探求」をいま読んでゐるが、なるほどインテリの絶賛をうけてゐる理由が分かつて思つた。作者は農村の

生活に相当詳しく若い指導者の現世的な悩みを哲学的に批判解決してゆかうとする熱意が全編に躍動してゐて面白い。貴兄も是非かいてほしい。結局、いつまでも内にしまつておいて、外に出して見せなければ勝負はつかぬし、宝の持腐れになつてしまふだらう。御自愛を祈る。

壺井繁治らの奔走によつて黒島伝治文学碑（「一粒の砂の千分の一の／大きさは／世界の大きさである。」）が香川県小豆郡内海町に建立された。その除幕式が昭和四十年十一月十七日に、小豆郡内海町苜の浦丘で催された。その除幕の式典に山内謙吾は出席し、祝辞を述べている。また、山内謙吾は、この時のことを詩に書いたのであろう。壺井繁治の山内謙吾宛書簡に「それに黒島伝治文学碑除幕式列席の感動をモチーフとした貴兄の詩（僕としては君の詩を見たのはこれがはじめてのような気がするのだが）、献詩としてはなかなか簡潔で、じゆうに詩として結晶していると思ひます」（昭和四十年十二月二十四日消印）とある。

33 「山内謙吾資料」／山内謙吾著 L O 2 \* Y \* 80 \* 4

堅山南風の山内謙吾宛書簡（封書二通、絵はがき一通）であ

る。「山内謙吾著」というのは誤り。

34〔山内謙吾資料〕／山内謙吾著 L O 2 \* Y \* 80 \* 2

壺井繁治の山内謙吾宛書簡(封書五通、はがき二通)、壺井節子が出した壺井繁治葬儀案内である。壺井繁治の書簡は昭和二十八年から昭和五十年までの間に出された戦後のものである。「山内謙吾著」というのは誤り。

以上が、関西大学総合図書館が所蔵している「山内謙吾資料」のあらましである。これによって「経歴さだかならず」であった山内謙吾のことが、かなり明らかになるようだ。

(うらにし かずひこ／本学教授)